北越雪譜二編巻二目録

雪頽より熊を得る
雪中の葬式
芭蕉翁の遺墨
○たせ戎の容貌
○亀の化石
○餅花
○斉の神祭事
○煉羊羹の起立
○雪頽の難
○龍燈
○芭蕉翁略傳
○化石渓
○夜光の玉
○斉の神勧進
○天狗羅の始原
○雪中の狼

通計十六條

本舗近刻

○骨董集三編二巻 四編二巻

右曜齋京傳先生遺稿 京山人百樹翁補訂

百樹翁著

○和漢印章考三巻 仝

○女粧考前後六巻

此書は上古より近古に至るまで古図を載古書を引て説を下し女の風俗に係りたる事は包羅輯載して餘こゝの且国学の書にて婦人乙夜の覧に供すべし蓋茲本編雪譜の餘帝爰に有を以姑近刻二家の著目を挙伏請雲顧の諸賢刊に先るの竜評是祈

江戸 書賈 文淑堂 謹白

北越雪譜二編 巻二

北越 鈴木牧之 編選

江戸 京山人百樹翁 増修

○雪頽に熊を得

酉陽雑俎に云熊膽春は首に在り夏は腹に在り秋は左の足に在り冬は右の足にありと云へり余試に獵師に問しに熊の膽は常に腹にありて四時同じと云へり蓋漢土の熊は酉陽雑俎の説のごとくにや凡獵師山に入りて第一に欲る処の物熊なり一熊を得ればその皮とその膽と大小ともに大なること八金五両以上に売るゆゑに獵師の欲るまゝなれども熊は猛く且智ありて得るに易からず雪中の熊は皮も膽も常に倍すゆゑに雪に穴居する熊を尋ね捜し獵師ども力を戮せて穴を捕るに種々

の術ある事初編に記せり たまゝ一熊を得るとも其倩に償と
分ゆゑ利得薄しさるとぶらゝて雪中の熊ハ一人の力にてハ得事
難しとぞ○茲に吾が住近在に后谷村といふあり此村の弥左
エ門といふ農夫老たる双親年頃のねがひよまりせ秋のそゞめ
信州善光寺へ参詣させけりさてある日用あるて二里だゝり
の所へゆきたる留守隣家の者過て火を出さゝたちまち軒ふ
うつりけるバ弥左エ門が妻二人の小児をつれて逃去て命一つを
助りくるのゝ家財ハのこらず目前の烟となりぬ弥左エ門ハ村ふ
火災ありときゝて走飯りしふ今朝出しに家ハ灰となりてたゞ妻子の
无事をよろこぶのゝ炊夫婦心正直にして親ふも孝心ある者ゆゑ人こゝ
を憐みまづもてらゝ我が家ふ居るべしと奬る富農もあるて
けるがわもゝハ奴僕の業をなりても恩に報ゆべきが双親飯り来りて

聴就双て人の家に在らんハ心も安からゝずして諾ず竊に田地を分く質
入をしてその金にて假に家を作り親も飯にて住けり草を刈鎌をさゝ買
求るほどありけるバ火の為に貪くなりしふ家を焼る隣家一對ひ
て一言の恨といふず交り親むこと常にまさりかくてその年も
くれて翌年の二月のなりしに炊弥左エ門山に入て薪を取りしに谷ふ
谷に落る雪頽の雪の中に黒き物有遥ふこゝと視て
ゆしに人のなりこゝふうこゝと死しるゆゑと幸にして谷よりより是を視き
バ稀有の大熊雪頽に打敷まとたるありけり炊雪頽といふ事初編にも
くわしく記るまゝ山に積りしる雪二丈にもあまるゞ春の陽気下より
蒸て自然に碎け落る事大盤石を轉しおとすがごとくにして遇で
人馬いさらなり大木大石もうちおとさるさゝバ炊熊もこゝとゆうこ
ゝとなりて弥ざるもんハよきものをこうけうと大に悦びはゝと

臍もとゝんとおもひしゞ日も西ふ傾くまゝバ明日きゝとんとて人の見つけざるゆうよ山刀わく熊を雪ふ埋めかくゝ心ふ同ちるゝ地ちく家やのゝ親やもかくゝてよろこぶせ次のあゝ皮を剥ぎ用意とおしてかゝふくゝふ臍ハ常よ倍して大きゝゝゆえ弁当の面桶ふ入まて持ゝゝゝ此人ありて皮を金一両臍を九両よ買ゝゝ弥ざゑもんたゝらず十両の金を得て質入をせゝ田地をもうけもゝゝまゝまゝよう屋敷幸ありて おゝく家もあらゝよ作りたていぜんふ向きうて栄けり弥左ヱ門が雪頼よ熊を得ゝるハ金一釜を掘得ゝる孝子ふも比まゝべく年頃の孝心を天のあはれゝゝ王ひゝなるんと人々賞ゝゝと交谷鶯翁がかゝうき

○雪頼の難

吾が住塩澤ハ下組六十八ケ村の郷元まゝバ郷元と與り知る家やハ古来の記録も残まゝう其旧記の中ふ元文五年庚申（百年ま）正月廿三日暁湯沢病の枝村 掘切村の后の山より雪頼不意ふ押落其響百雷の如く百姓彦右ヱ門浅右ヱ門の両家なゝまふゝゝゝ家つゝまゝ彦右ヱ門并ふ馬一疋即死妻と嗣息ハ半死半生浅右ヱ門ハ父子即死妻ハ梁の下ふ壓まて死ふゝゝらず此時 御領主より彦右ヱ門息（米五俵浅右ヱ門妻（米五俵賜ゝ事を記ゝあり此魚沼郡ハ大郡やて 会津侯御預りの地あり元文の昔も今も御領内の人民を恤玉ふ事 仰ぐゝく尊むゝゝそのありがゝさを吾が后ゝも示さんとて筆の序まゝるせゝり近年ハ山家の人家を作るふ此雪頼を避て地を計るやもそのの難まゝまゝゝゝも山道を往来まゝる時あゝゝまゝゝゝまゝ死まゝるもの間ある事あり初編ふもいゝゝゝ如く

○ホウラい冬やあり雪頼ハ春まゝあり他国の人越後よ来りて山

下と往来せざるをうらあざるを用心まで〳〵他国の人こゝに死〳〵たる石塔今も所〻ありおそるべし〳〵

○雪中の葬式

吾が国に雪吹といふは猛風不意に起りて高山平原の雪を吹散し〳〵その風四方に吹きめぐり〳〵て寒雪百万の箭を飛ばすが如く寸隙の間をも許さざるゆゑ往来の人は通身雪に射まゝて少時に半身雪に埋まゝて凍死する夏まゝもいとまなく〳〵此ふぶきは晴天にも俄にもとり二日も三日も雪あゝ〳〵てふぶきする事あり往来もこゝまで為にとまること毎年あり此時に臨で死亡せしもの雪あれのやむを待も程のあるものゆゑせんかたなく雪の中に犯て棺を山に寄事あり施主はいろゆゑもあるべきに他人乃困苦事見るもきのどくあり〳〵これ雪国に一〻の苦状といふべし〳〵我江戸に逗留せし〳〵旅宿のちかきあたりに死亡ありて葬式の日大嵐なるに宿の主もこゝまに往とて雨具きびし〳〵ゆゑ〳〵今日の仏はいとある因果ものゝやかる嵐に値て人に難義をかゝるなどゝ思ひとても極楽にはゆるまじきつぶやきを立いづるを見て吾が国の雪吹に比ぶるとバ〳〵安〳〵とおもふ

○龍燈

筑紫のちぬ火とは古哥にもあまたよむ〳〵よりその名たゝまあまねく人の言る所なり我の蒙さまへ春暉が西遊記にもぬ火を視たりとそ詳に言るゼリ甚ちぬ火とは世に竜燈のたぐひなるべし我国浦原郡に鎧潟と云潮湾あり東西一里半南北一里の湖水毎年二月の中の午の日の夜酉の下刻より丑の刻頃まで水上に火発る里人は鎧潟の万燈と称り観る人多〳〵余が友人豆をそゝるをきしに此

西遊記ふ有りしるつしの有る火とおなじさまあり近年湖水を北海へおとし新田とあらしめ多湖中の方物も今人家の億燈と為るより又我国の八陸六嶺ふ八つの地あり依て山の名とす絶頂ふ八海大明神の社あり八月朔日を縁日とし山ふのある人多く此夜ふかぎりて竜燈あり甚美る所と見る人なしとふ古へ竜燈とふ名おかくハ春夏秋あり 諸国ふある夏諸書ふ有りしを見ふいづれも有りしかども海よりも出山よりも出ずる毎年甚日甚刺限定りある事甚奇異あり竜神より神仏へ供と云が普通の説なれどあふ孫き竜燈の談あり中く竜燈を解べき説なしバ如く有りて好事家の茶話ふ供す

我国頸城郡米山の麓ふ医王山米山寺ハ和同年中の創草あり山ふて薬師堂あり宇内女人を禁ず此米山の腰を米山嶺と越後北海の驛路あり此辺古跡多く余先年甚吉跡を尋んとて下越後ふあるべし時新道村の長飯塚知義の話ふ一年夏の頃雲のゐふ村の者ども数人米山へのがりしふ薬師へ参詣の人山ふりるるためふ御鉢とふ所ふ小屋二つあり我の小屋へ一宿ありふ是月六月十日ふ此御鉢とふ所へ竜燈のあるを夜あり おりひまりけるとて竜燈をうる事よとて人ども集まりをしふ西の刺とふ頃ふ人ども有きさりあつまりしふ大なるふ手鞠の如く小なるハ雞卵の如し大小番ふ此御鉢とふ所をさすして飛行きる事あるひハ有るやうあるひハ有るそのさま心あり遊ぶが如し甚光りハ螢火の色ふ似たり つよくも光りよわくも光るあり弄ひめぐりてちらくもとぶまるハ有くあまさありてかぞへがたしとぞ人ふ小やの入口を閉人ひとまりて覗みるべこふ人有りもちゆんざるやうふ大小の竜燈二つ三つ小屋の東七八間さきふまくこきさりしを加ぶひりふすしこうべ形ち鳥のやうふ見えて光り咽の下より旋つやうあり猶近くよりがたもたしふ視ふ見けんとおりひしふ有りくハよりぶしてゆるやふ飛めぐりて此夜ハ山中

ふ一宿の心得あるべし心用の為べき筒をも持ぜーよ手たゞ[illegible]の上手あるも若あのあるしが光を的よくんと思るを老人ありてやまをまとおーしゃめあるあるたゞあり此竜燈八竜神より薬師如来さくけあるあり罰あるみやと叱りる声ふ竜燈八おどろきるやうゆたるる遠く飛さしと知義語るき」

○芭蕉翁が遺墨

おもて越後の雪とよのこうり哥あるーとあるとも越雪と目前ーく

よくこるいまをあり　西行が山家集頓阿が草菴集ふも越後の雪の哥あり一説韻僧こちも越地の雪八ちーざるーー俊頼朝臣ふ

「降雪ふ谷の傍うづもれて梢で冬の山路あり」これらハ実ふ越後の雪の真景ふまとを説あるん越後ふきこり玉ひーふいあらず俗よ

いく哥人ハ居ふがら名所をもるあり　伊達政宗卿の御哥ふ

「さびしとも誰うハ越人関の戸も降うづめこる雪の夕暮」又「もろく

ふつぐらとろる道絶て雪ふ隣のちきき山里」　此君ハ御名たくの

き哥仙おておもーーまもーーあるかるめでこきき御哥もありて人の

口碑ゆもつくふ雪の実境をもーーー玉ひーハちろーーめまて御国も深雪

ふまとハ[illegible]り芭蕉翁が奥ふ行脚のくるこ越後ふ入り新潟ふて

「海ふ降る雨や恋ーきこうきき身宿」寺泊ふて「荒海や佐渡く

横くふ天の川」こを夏秋の遊杖ふて越後の雪と見ざる事必せり

こをとバ近来も越地ふ遊ぶ文人墨客あまくあるとで秋のまるふい

くをとバ雪をおもてして故郷へ逃飯るゆえ越雪の詩哥もあく紀行

もあーー稀ふハ他国の人越後ふ雪中ちるも文雅あきい筆ふのこ

す事ふーー吾が国三条の人崑崙山人北越奇談を出板せーーが六巻絵入りあるる本

文化八年板　一辞半言も雪の事をもるるこで今文運盛ふーて新板湧うご

とくちるこでも日本第一の大雪ちる越後の雪と記ーーる書

芭蕉翁訪康雲圖

涼雲を
たの敷て
葉櫛や
いつ迄ゝ
志を
世枕
芭蕉

ふ一ゆゑよ吾が不学をも忘れて越雪の奇状奇蹟を記す
後来よ示し且越地ふ係りし事ハ姑く載て好事の話柄とす
さて元禄の頃高田の御城下ふ細井昌庵といひし医師ありけり
一ふ青庵といひ俳諧を善して号を凍雲と称せり翁
奥羽あんぎやのゝ凍雲をたづねて「菜棚よりいづるの花を草枕」と
発句ありけるとバ凍雲とりあへず「萩のすゑを巻あげる月」此時の
ゑせ公が肉筆二枚ありて一枚ハ昏損と覚しく淡墨をもつて一抹乃
痕あり二枚とゝふ昌庵主の家ふつゝしを后ふ本昏い同所の親族
三崎屋吉兵衛の家ふつゝ昏損のハ同所五智如来の寺ふのこりしを
るふ文政のころ其地の邦君扈雅とこの〳〵王い〳〵ゆゑかの二枚持主よ
り奉りけるとバ吉兵ヱ〳〵常信の三幅對ふ白銀五枚りの寺〳〵もあつき賜あ
りて今二枚とゝふ御蔵とありぬと友人葵亭翁ゞものがたりしつ

葵亭ハ翁ハ蒲原郡加茂明神の修験宮本院名ハ義方吐醋と号し
又無方斎と別号ゑ隠居して葵亭といふ和渓の博識北越の風人
なり芭蕉ゞ件の句ものふ見えざるといふるせり
百樹曰芭蕉居士ハ寛永廿年伊賀の上野藤堂新七郎殿の
藩ふ生る次男なり寛文六年歳廿四ゆゑして仕絆を辞し京ふいでゝ季吟
翁の門ふ入り昏を北向雲竹ふ学ぶゝめ宗房といふ季吟翁の
句集のものゝ中ふ宗房とあり延宝の末ゝ江戸ふ来り杉風が
家ふ寄小田原町魚屋藤左ヱ門剃髪して素宣といふり桃青ハ后の名なり
芭蕉とハ草庵ふ芭蕉を植しゆゑ人よりよびなる名の后ふ自号
ふなりぬ翁の作ふ芭蕉と移辞といふ支ありその終りの辞ふ「たまく
花さくも花ゆゑふらず莖太けれども斧ふあらずかの山中不材の
類木ふたぐへてその性よし僧懐素ハ是ふ筆を走らし張横渠と

新葉を見て修学の力とせしとあり予その二ツをとらずたゞ炊煙よ遊びて風雨ふ破れ易きを愛まし「其世況野分して盥ふ雨をきく夜」炊芭蕉庵の旧蹟ハ深川清澄町万年橋の南詰ふ対ひる今或侯の庭中ふ在り古池の趾今ふ存せりとぞ（余芭蕉年表一名年代記とも考証未定ゆえに刻とやらず）翁身を世外ふ置て四方ふ雲水し江戸ふ趾をとゞめず終ふハ元禄七年甲戌十月十二日「旅ふ病て夢ハ枯野をかけ廻る」の一句をのこして浪花の花屋ゞ旅囚ふ客死せり是蓬世の知る処あり翁ゞ臨終の事ハ江州粟津の義仲寺ふのこしゝる榎本其角ゞ芭蕉終焉記ふ目前視るゞ如くふ記せり炊記を視るふ翁いとゝ菌毒ふあたりて痢しとあり九月晦日より病ふ臥僅ふ十二日ふして下泉せり炊時病床の下ふあり門人○木節（翁ふ薬をあたる医なり）○去来○惟然○正秀○之道○支考○春舟○大草○乙州○伽香以上十人あり其角ハ炊時和泉の淡の輪ふ居ふありしゝゞ翁大坂ふ来きて病ともなりて十日ふ薨り十二日の臨終ふ遇て奇遇といひつべし（以上終焉記を摘要せり）其角ゞ終焉記の文中ふ（炊記義仲寺ふ施板ありて人のもちゆ又キ角ゞかれをおもひよせ）『義仲寺ふうつして葬礼義信を尽し京大坂大津膳所の遷衆彼官従者までも炊翁の情を慕ふるゆえて招ざるふ馳来る者三百余人あり浄衣その外智月（百樹云大津の米屋の母翁の門人）乙州ゞ妻縫たてゝ着せまゐらす』又曰『三千餘人の門葉辺遠ひとつふ合信まる因と縁との不可思議いかゝも勧破ちゞ』『百樹おもふ孔子ふ三千の門人ありて門ふ十哲をいゞす芭蕉ふ二千の門葉ありて庵ふ十哲とゝゞ門人ありし至善の大道と遊藝の小技と尊卑の雲泥ハ論よおよぶべきとも孔子七十ふして魯国の城北泗上ふ葬て心喪を服せる弟

子三千人芭蕉五十二ゆゑして粟津の義仲寺ふ葬る時招ざるふ来る者三百餘人是以人ふ師とするの徳あるをおもふべし

蓋芭蕉の盆石ゞ孔夫子の泰山ふ似るをいふまり芭蕉曽駐俗の風輕薄の習少しもあるべしふ吟咏文章ゆゑもちる共翁が其角ゞいへるごとく人の推慕する事今ふ於も不可思議の奇人あるべきれば一句一章といへども人こゝ戒句碑ふ作りて不朽ふ傳ふる事今猶句碑のあらざる国なし吟海の幸祥詞林の福禎文藻ふ於て共人の右ふ出る者なしさればふ本文ふもいるまでなかりそあふいひもてゝる茶橘の一句の墨痕も百四十余年の后ふいたりて文政の頃白銀の光りをたゝもつそゝ論外不思議といふべし

蜀山先生嘗謂予曰凡文墨とゆゝて世ふ遊ぶ者再ハ論せず死後よりゝ一字一百銭ふ当らゝ身ゝふゝ文雅幸福足へし

きゝき共先生ふ今其幸福あり一字一百銭ふ当らゝ事嗟乎難れ

○さてまゝ芭蕉ゞ行状小傳ハ諸昏ふ散見して普ゝ人の知る所ありまゝ共も翁の容貌ハ挙世知る人あるべきゝ共ふ美ふ一証を得るゆゑ共雪譜ふ記載して后来ふ示ふいかゝる瑣談も世ふ埋没せん事のをしけきゆゑ共雪ふ摹す筆の老婆心あり

○まゝふ二代目市川團十郎初代段十郎の俳号と嗣で才牛といふ后ふ柏莚とあらたむ元文元年共柏莚ハ正徳享保変

○寛保を盛ふ歴ゝ名人あり妻をおさいといひ俳名を翠仙といふ夫婦ともふ俳諧を能し文雅を好り共柏莚ゞ日記のやうふ昏残したる老の楽といふ随筆あり二百四十余の自筆あり嘗閑外山ざゝし

を狂哥坐真顔翁珠昏ゆゑ共貌望してかの家より借りゝる時余も亡兄ゝともふ読しことあり

うち柏莚一蝶が引船の絵の小屏風と風入まさる旁ある人
参をきざみ[illegible]ら狀繪ふむかしをおもひいだして独言ひける
を記しくる文ふ「我も幼年の頃もじめて吉原を見る時黒
羽二重よ三升の紋つけあるうり神を著て右の手を一蝶ゆひら
もと左りと其角ゆ[illegible]て日本堤を往し事今ふ忘ず狀ふうり
い世ふ名をひぐらせられど今ハかき人ぶり我い幸ふ世ふありて名
もまと頗る聞えうり中巻　今日小川破笠老まるらるむ[illegible]の
たちし せらるるあらふ芭蕉翁ハ[illegible]おのてうもゆ[illegible]いろ白
く小兵ぶり常ふ茶のつむぎの羽織をきらると嵐雪よ其角が所
いてくるぞよとものたづふらるるとうくらるたり」狀文ふ云
を今目前ふ見るが如し　翁の門人推然が作とふ翁の肖像あり ひハ画幅
小川破笠俗称平助壮年の頃放蕩ゆて嵐雪と倶ふ　肖像世ふ流傳まるものゝ世説とあ[illegible]せ視る　俗称服部彦兵衛

其角が堀江町の居ふ食客たりし事件の老の樂又破笠が
自記ゆも見ゆ破笠一ふ笠翁まと印觀子夢中庵等の号あり
絵を一蝶ふ学び俳諧ハ其角を師ゆて余が藏する画幅ふ延享
三年丙寅仲春夢中庵笠翁八十有四筆とあり描金を善して
人の粕をなめず別ふ一趣の奇工を為す破笠細工とて今ふ賞
せらる吉原の七月創て機燈と作りて今ふ其余波を残り傳詳
ならぬもさのくいとてもうせぬ

○化石溪

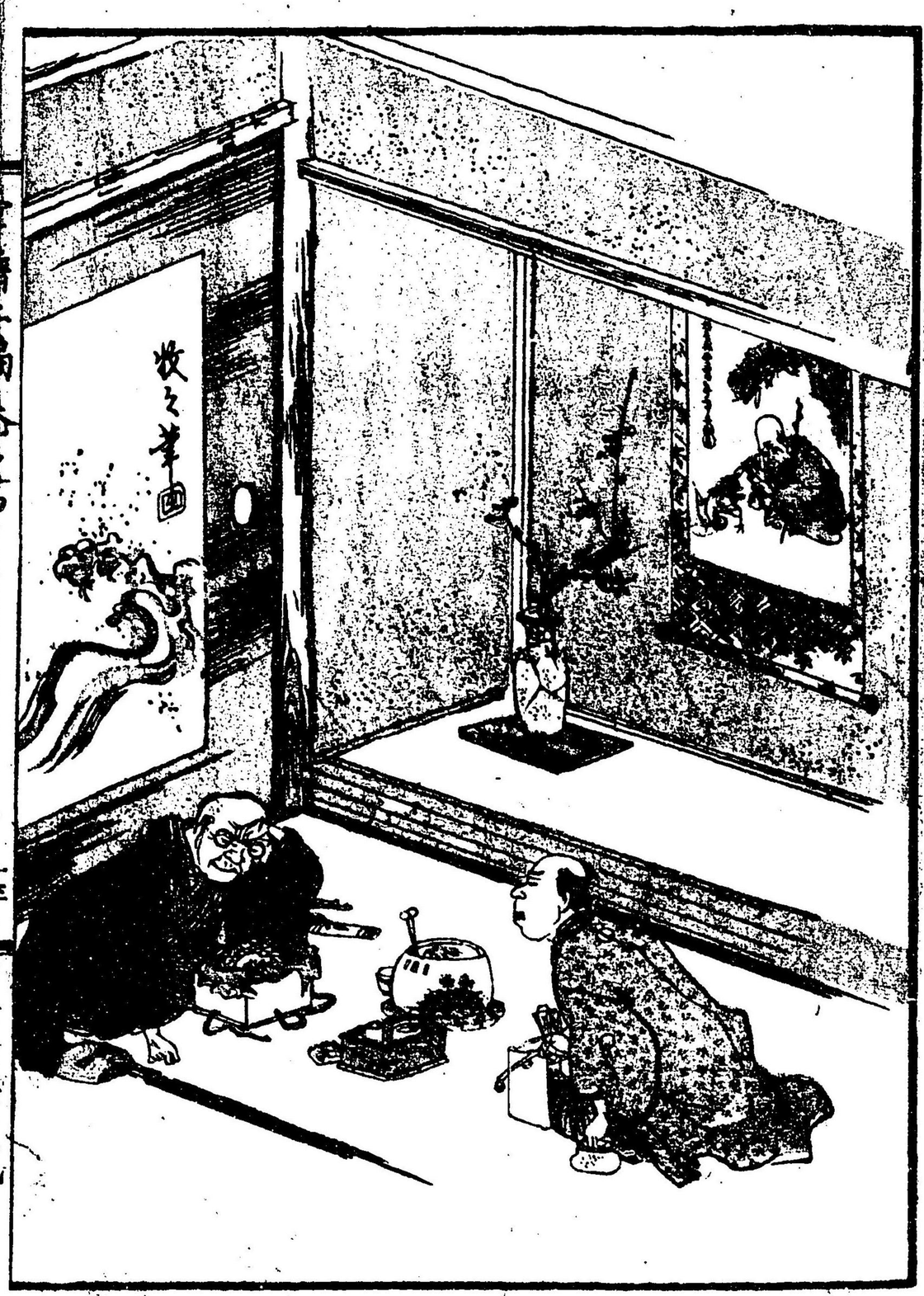
東游記よ越前国大野領の山中ふ化石溪あり何物ゆても半月あ
るひハ一ケ月狀溪ふ浸しおけばかぶ[illegible]ず石ふ化す番物いざらもり紙
一束藁ゆてむすびくるぶ石ふ化くるを見ようと云るせり我ぶ越後ゆも
化石溪あり魚沼郡小出の在羽川とふ溪水一蚕の腐たると流しゆ

一夜ゐして石ゐ化したりと友人菱亭翁がかたりまきかの大野領の化石溪ハ東游記の為ゐ名高けれども我ら国の化石溪ハ世ゐしられず又近江の石亨ゞ雲根志変化の部ゐ前編人あり語云越後國大飯郡ゐ寒水滝といふあり此処深山幽谷ゐして冱寒の地なり此滝坪〻万物を投こむゐ百日を過ずして石ゐ化すこと滝坪の近所ゐて諸木の枝葉又ハ木の実その外生類まで石ゐ化するを得ることで予去る頃此滝の石を取よせし人ありて見るに常の石ゐあらず全躰鍾乳なり木の葉まで石中ゐ浮むゐ則石なり雲林石譜ゐいふ鍾乳の摶化して石ゐなるゐらん云云牧之案るゐ越後ゐ大飯郡ゐ又寒水滝の名もきゝず人あり語るとあもゞ傳聞の誤なるべし蓋北越奇談ゐ会津ゐ隣る駒ゞ岳の深谷ゐ入ること三里ゐして化石溪と名付る処あり虫羽草木といへども溪ゐ入りて一年を歴るゞゐ化して石となる其川甚苦寒ゐして夏も渉ゞ難ゞ如し又蘇門岳の北下田郷の深谷ゐも化石溪あり云云雲根志の説ハこれらの所を聞誤るゐらん

○亀の化石

吾ゞ同郡岡の町の旧家村山藤左エ門ハ余ゞ壻の兄なり此家よ先代より秘蔵もする亀の化石あり傳ていふ近き山間の土中ゐ掘得たりと実ゐ化石の奇品なり茲ゐ図を挙て弄石家の鑒を俟百樹曰件の図を視るゐ常ゐある亀とハ形状少〻異なるゆゑなり依て案るゐ本草ゐ所謂秦亀一名筮亀あるひハ山亀といふ俗ゐ石亀といふ物ゐもあり秦亀ハ山中ゐ居るものなりゆゑゐ呼で山亀といふ春夏ハ溪水ゐ遊び秋冬ハ山ゐ蔵る極て長寿もする亀ハ是なりとて又筮亀と一名もするハ周易ゐ亀を焼て占ひ

堅 曲尺五寸五分
横 四寸五分 厚二寸六分
重 八百目



しかも亀ありとて件の亀の化石本草家の鑒定を得て素亀ふ亀ふべ一層の珠を増し山ふて掘得ることあるとぶ素亀ふちるきゆうちゆう化石といふものあまた見しふ多ハふきめそあるひいまく休全も稀ある図の化石ハ休全く且大きあり珍とすべし。余先年俗ふいふ大和めぐりをしるをり半月あまり京ふあそび旧友の画家春琴子ふ就て諸名家をたづね一時鴻儒の聞高き頼先生名襄字子成山陽号通称頼徳太郎も訪ひ坐談化石の事ふおよび先生余ふ蟹の化石一枚と恵その色枯ずして生ぐ如く堅硬ことハ石ふあり潛確類昏又本草三才図会等ふいとる石蟹泥沙と倶ふ化して石ふありとあるべし盆養をる石菖の下ふおのふ水中ふ動ぐ如し亀の徒者ふ其図と出す是も今ハ名家の形見ともなりぬ

○夜光玉

雲根志灵異の部ふ曰予ぐ隣家ふ壮勇の者あり儀兵衛といふ或時田上谷といふ山中ふ行て夜更て飯るふむかうある山の澗底より青く光り虹の如く昇てをるハ天ふ接る状男勇漢ハ元二元三ふ草木を分けて山と越谷をけりてかの根元をさぐるふたぐ何の異る事もなき石ありひろひとりて背ふ負ひ飯るふ道をぐら光るまゝと前の如し甚ぐ夜道の労をたすけり暁の頃我ぐ家ふ着ぬ件の石を軒の外ふ直し置朝飯ふぐをくあて彼の石を見んとするふ石ふ一いふ事やらんとさぐふたづねもむれども行方をきずとかん又本国甲賀郡石原潮音寺和尚のものぐらり迄里の農人畑を掘居しふ拳たぐるる石をうりいぐせり状石常の石よりハ甚ぐうつくしよりて取りかゝりぬ夜ふ入りて光ること流星の

如一友のいふ是ハ霊石あり人の持ものふあらず家ふあるべ
しとやくおやぶりてもつぐしをきて斧をもつて打碎くと竹
やぶの中にもてこり其夜竹林一面ふ光る事数万の蛍火の如一翌
朝近里の人きつつく集り来り竹林をたづひろふ打一のこぐ
までも一石も有る事なし又筑后国上妻郡の人用ありて夜中近
村に行よ一ツの小川ありかちこさりせしふあらん光る物あり拾ひ
とりてこゝろもとバ小石なり翌日さる方に献ずもぐくし失うしぬ以上
一条全文是等ハ他国の事なり我が越后にも夜光の玉のあり事あり
新発田より蒲原郡東北加治とのゝ寺と中条といふ所の間路の傍田
の中よ庚申塚あり此塚の上ふ大き一尺五寸ばかりの四石と鎮し
てこれを祀る此石その先農夫屋の后の竹林を掃除して竹の根
もぐ掘るとてかの石一ツを掘得るその色青くありて黒く甚さ

あらくあり農夫こゝをとりて藁をこうり盤にふす其夜妻庭ふ
出くふ燦然として光る物あり妻妖怪なりとして驚叫家主壮夫
三五人を伴ひ来りて光る物を打ふ石なり皆もつて怪くに石と竹
林ふ捨つその石夜毎ふ光りあり村人おそれて夜行ものふ依て
此石を庚申塚ふ祭り上ふ泥土を塗て光をかくす今猶若むして
あり好事の人この石をもとめども村人祟あらん夏を摂てゆるさずこと
又駒ヶ岳の麓大湯村と行尾村の間を流るゝ渓川を佐奈志川と
いふひくせ渇水せ一頃水中ふ一点の光あり蛍の水よあるが如一
数日処を移さず一日暴雨よ水増て光り一物所を失ふ后四五町川
下よ光りある物蛍火の如一此地山中ふまきバ村夫等昏愚ゆくく
夜光の玉ある事をもくず敢てたづねもとむる者もあるふ其歟
の洪水よ夜光の玉ふくびもとて所在を失ひとこそ以上北越奇談の説偖

茲ふ夜光珠の実事あり我文政二年卯の春下越後を歴遊せしとき三嶋郡ふ入り伊弥彦明神を拝旧知識なるまゝ高橋光則翁と尋しふ翁大ふよろこびて一宿を許しぬ扶翁和哥を善し且好古の癖ありて卓達の人なり雅談傍ら如くおのゝず節をとゞめ事四五日ふゝ一夕翁の語りくるゝ今より四五十年以前吉田の三島郡の内まゝりを大島川とゝふ渓川ふ夜ふく光りものありて人姥て近づくものめゝゝしふ扶川の近隣ふ冨長村とゝふありもくふ鍛冶の兄弟ありひとりの母と養ふ家最貧し扶兄弟剛気なるものゆゑふかの光り物を見きらめゝ妖怪なゝば退治して村のものどもゞ肝とむしゞんとする夜兄弟かゝふゝふをゝしふ秋の頃水もまさゝ川面をゝるふ月暗くして水の音ときくのゝ両人炬をとりてゝゝてゝゝをとゝゝふ光るものちらふゝくまゝく怪しむゞきをゝずさて〻人のゝゝいはく空言ふゝんいゞとて飯らんとまゝゝふ水上俄ふ光明を放つまゝゝやとて両人衣服を脱まて水ふ飛入り泳ぎよりて光る物を探りゝるふくゝゝ枕なゞるる石ありゝをを取得く家ふ飯りまづ灶の下ふ置しふ光り一室を照せりまゝゞくのよゝ母ふかゝゝけゞバ不思議の室を得ゝとて親子よろこび近隣より来りゝるをあゝしゞりのまらぬ者どもあゝゞバ趙璧隨珠ともおもゝゞ

うち過ゝりかくて后弟別家をする時家の物ニツふ分ちて弟ふちんや母のゝひしふ弟ハ家財を望まで光る石を持去んとゝて兄がいゝく光る石を拾ひ得しハ我が企ゝり汝ハ我が力と助しのゝゝ光る石ハ親の譲ふあらず兄が物ゝり家財を分ゝゞおやのゆゞりとゝゝゝゝゝゝゞけまゝちふまゞゞ弟いふゝくあのの石ハおゝゞのゝゝいんとゝゝゝゝバゝん身ハ光る石を拾んとの企ゝふ光あゝず妖物と退治せんとて川へい

たりおん身よりハ我先よ川へ飛いり光りものを探りあてゝかづき
あげしも我なりされバおれがものなりとあらそふ弟ハ我持さらんとあらそひいや
く兄がものなり弟がものなりと口論やまず終ひにつかみあひたる折
ひとを母やりしにそれしもつめよりてハ光る石を二ッに破りて分つべしと
いふ弟さらバとて明玉をとりいだし鍛冶ある鐵の上ふのせ鎚をもて
力ふまかせて打ければさしもの明玉砕破内ふ白玉を顕しつゝまたも
砕け水ありて四方へ飛散けり其夜水のこぼれし処光り暉く事蛍の群
るゝが如くなりしが二三夜にしてその光りも消失けりとぞいふに頑愚の
手ふありしとハいひながら稀世の宝玉鄙人の一槌をうけて亡びるハ
玉も人も倶ふ不幸といふべしと語られき按之に橘春暉が著せる
北窗瑣談後編の二藏石家の事をいふ條ふ曰江州山田の浦の木之内古
繁伊勢の山中甚作大坂の加嶋屋源太兵ヱ其外ふも三都の中の
好事家侯國の逸人藏石ふ名の高き人近年夥し余も諸家の
奇石を見しに皆一家の藏る処三千五千種ふいたる五日十日の
日を尽してやう／＼眼をふるゝ事を得るにいたるその多き中ふ
も格別ふ目をおどろかすほどの珍奇の物ハ无かりしが加嶋屋
源太兵ヱものがたりに過し年北国より人ありて拳の大さ乃
夜光の玉ありよく一室を照すよき價あらバ賣んといひしゆゑ
即座ふ其人よ托して曰其玉求たし暗夜にその玉の入りたる箱
の内ばかり白きゝ紙に見えなバ金五十両ふかうべし又その玉
をもて闇夜に大なる文字一字にても讀えなバ金百両にかうべし
又昼状よむほどならバ三百金いよ／＼一室をてらさバ吾が
身上のこらずの力を尽して求むべし媒して玉りるべしと
いひしがそのゝちかの山の便もなくてやみぬ空言にてありしと思る

云云 扶文段ハ天明年中藏石の世ふ流行たる頃加嶋屋ゞ話を
そのまゝふ春暉ゞ后よりたるゝゞしきて又余ゞかの鍛冶屋
ゞ玉のゝ形をきゝ〳〵ハ文政二年の春ゝり今より四五十年以前
とあまゝゞ鍛冶ゞ玉を碎きたるハ安永のするゝ天明のたゞめ
あゝゞ狀りとゝれゞ藏石の流行する頃ゝまゞかのゝじまゝゞ
話ふ北國の人一室ゝてらすゝ玉のゝりゝのありしとゝひゝ我ゞ国の
縮商人あゝゞかゞゝの玉の夏をきゝゝゝ商ひ口をいひゝゝ
らゝとすゝゝふ玉ハくゞきゝゝきてかゞまゝ答ゞざりしゝゝ
あらんゝ和ゞ玉も楚王を得ゝゞて世ゝもいゞゝゝゝ右ゝのせ
たる夜光の話五ツあり三ツハ我ゞ越後ふあゝ事ゝりいゞゝゝも
世ふいゞすゞ嗟乎惜むゞゝ
百樹曰五雜組物の部ふ鍛冶屋ゞゝゝふ類せる夷あり

明の万暦の初閩中連江ゝの所の人略を剖て玉を得ゝゝゝ
ゞも不識ゝゝを烹る珠釜の中に在て跳躍して定ず火
光天ふ烛里人火事ありんと驚き来りてゝゝゝ救ふ玉を烹
ゝるものゝゝゝと聞て釜の蓋と啓て視るハ已ふ玉ハ半拈ゝ
其珠徑一寸許映真ふ夜光明月の珠ゝり俗子ふ厄せらゝゝる
事悲夫〳〵記せり又曰五雜組魏の恵王ゞ徑寸の珠前後車
戎照こゝ十二乗の物むゝの事今天府ふも夜光珠ゝゝし
と明人謝肇淛ゞ五雜組ふゝり。神異記。洞冥記ふも夜光
珠の支見えゝゝゝゝゝゝ孟浪ふ属す古今注ふハゝゝゝゝて大ゝる
鯨の眼い夜光珠とゝゝゝゝゝゝゝゝ卜和ゞ玉も剖之中果有玉とい
ハゞ石中ふ玉を孕たゝ事鍛冶ゝ碎ゝる玉卜和ゞ玉ふ類せゝゝ
趙の恵王ゞ夜光の玉を秦の恵王ゞ城十五と以て易んとゝひゝハ

加嶌屋が北国の明王を身上尽し買んと約せしふ類せり
さて又癸辛雑識続集下巻ふ擬蜂糸を水ふひ〳〵おきくるる
ふ夜中白く大なる蜘蛛きくうりてその水をのむふ身ふ光りを
ましなうかの婦人ことを見て大中あ中〳〵雞竜を罩てうの蜘
蛛をとらへふ腹ふ夜光珠在ちき蟬丸の如〳〵とるせり坎事
を前文ふ牧之老人が引くる北越奇談王の部ふ越後よあり〳〵事ことて
ぶせうるの事癸辛雑識ふ少し〳〵もちがいすふ癸辛雑識ハ唐本
ふて且又容易ふハ得がたき書なれバ北越奇談の作者俗子の目ふ奇を
ましてたるもるふ越後の事とうてかきくるるべしし
癸辛雑識続集巻下ふ得がけ長ハ本書我
見るべかるべ博識ふ傳閲ちるるべ
第冊ふ轉輪聖王の徳よそなるたりるる一尺六寸の夜光摩
九尼宝ハ彼国十二由旬を照すとあり文多けれどいあげず蓋一
由旬ハ異国の四十里なり十二由旬ハ日本道六十六里なり一尺
六寸の王六十六里四方と照ハ奇異といふ〳〵轉輪王此王

又増一阿含経第冊三。等法品

と得て試ふ高き幢の頭ふ擎著けるふ人民等王の光りと
もなるず夜の明〳〵りとおもひかの〳〵家業をそどめろうと記
せり此事碩学の聞高きア阿上人の語ふきてかの経と借
得て読しぶしで夜光の王の親王なるべき

餅花

餅花ハ夜ハ鼠ぐよりの野山一ふねの月とうとい とハ其角ぐまいのそずふ
アア江戸まぐの餅花ハ十二月餅搗の時もちぐふ拵作り歳徳の神
棚へきくるよりの俳諧の季ふハ冬とす我国の餅花ハ春なり正月十
四日まぐを大正月とうひ十五日よりうり廿日まぐを小正月とうて是我
里俗の習せなりさて正月十三日十四日のうちふ門松をあがぐり
を取アア拂ひ我国長岡ハて八正月七日ふかぐ
宮歳徳の神庚申の〳〵餅花一枝ア神棚へきくるその作り

岡夫得名玉図

やうハうづ木やうづ木あるひハ川楊の枝をとりてふ餅と三角又ハ梅桜の花形ハ切てる紙かの枝ハきゝあるひハ團子ともまゝこしを蚕玉とつゝ稲穂又ハ紙ハて作りてる金銭編あきびとやどいちごのひ形と紙ハて作り農家ハてハ木とけづりて鍬鋤のたぐひ農具を小さく作りてもちぐるまの枝ハのくるまべておのゝ〳〵家業ハあづかるものゝひかりこれ耕ることゝその業の福といのるの祝事ありもちぐるを作るハおわりつゝきものゝ手業ありて祝ひとて男女ともうちまゝつゝて声よゝ田植哥とうゝふ歌ことをきけバ夏ごこひ〳〵家の上ハ雪のたやくきえよかゝとおもふと雪国の人情あり歌ハ餅花ハ俳諧の古き季寄ハもいでこれバ二百年来諸国ハもあるハ勿論ありちぐろ江戸ハ季ハよらず小児の子遊ハ作りあきまるハとき〳〵

斎の神勧進

我ゞ塩沢近辺の風俗ハ正月十五日まゝ七八歳より十三四までの男の童ども斎の神勧進とゝふ事をなすハ一冨家の童ども竹ハ棒ハ棚木と上下より削り掛て鍬の形を作ることゝ三棒とゝふことゝ二本大ハきゝ上下とちゝ〳〵童僕ハ一外まゝとゝせ又ハひもありてくびかけるありその中ハ五六寸だるの木を頭だるり人形ハ作り目鼻とるぐゞき二つゝりて女神男神とゝ女神ハかゝらハ綿ときせ紙ハて作りる衣服ハ紅ハて梅の花ハぐるぐゞく男神ハ烏帽子をきせ木とけづりけて鬚とゝ紙のいふくふ若松ハぐるぐゞく女二ツ松かの升の内ハおきゝ斎の神勧進とゝとよぐりありく敢物の欲ハもあらず正月ハそびの一ツなりこゝと二人のゝふあらず児輩ハのゝくまる事ありこゝとよりるあハく

切餅あるひハ銭もちゐ又まづ一きよのこまらづらく五七人十人餘も賞
とゝ〜茜木綿の頭巾まあきぎの入りをとりこるをかむりかの斗棒
我一本さしうの二神と抑ろふ入まて首ゆりけ「さらの神ゑんぐん
銭でも金でもくろうくとおゆもくと門くとおゝ〜ありくこまふ
銭をのまあくあるひハ浊り酒ゆでのませ顔ふ墨とありてまらひど、
よろくこれかをゝずまるまらいせまり又長岡のやうゆていうの
斗棒のけづりかけの三尺だろうあるふ空づゝあどもづきこるとと」
て勧進ちこまといふ小児よりらまで大人のいゆきぐづまり勧進のこと
だふ「せゝでもかゑでもおいゆきこらいねんの春ハ嫁でも聟でもとる
やうふ泉のすこらまくゆうふすツくらすうとおいゆきこ〜」かく
して勧進の銭とあつめて斎の神を祭る入用とまるまりのまろ
下ふた又去年むこまるをむくこる家の門ふ未明よりまらでも

大勢あつまりかの斗棒とゆて門戸を敲きよあをとだせもとゝせ
同音ゆよづづりたゝくこれを里俗の祝事ちすまびいる家ゆくふども
を入まて物をゝくこまるゆありかるる俗習他国ふもあるこなるゝ
○さて扶事たるいゆまゆきゝ小でものたゝもとのこおゆひまゝをゝふ
醒斎京傳翁ゞ骨董集を読て本拠あり事を発明せり骨董集
上編下。粥の木の條ふ。粥杖。祝木。かゝくけ棒とゝふ物前ふいひ
斗棒ふ同ゝ京傳翁の説ふ粥の木とハ正月十五日粥を烹ゝる薪と
杖とゝ子もこゆ女のたゝをうてバ男子をたらむとゝふ祝ひ事なり
とて。枕の草紙。狭衣。弁内侍の日記その外くさ〜の昼と引て
上代の宮裏近古の市中粥杖の事を挙て考証甚詳あり今
我ゞ郡ふりゝ斗棒バ則いゆ〜の粥杖の遺風あり事を発明せり
我国ふも祝木あるひハ御祝棒とゝ〜所ゆありこれ七八百年前よう

正月十五日よりの事京傳翁ゞ引まくる昏ゆく
引昏の中ゆも明人の作日本風土記ゆあるハゆも我国のゆく
似くり炎昏ハ今より三百年ぜんゆいぜんの日本の風俗を明人う
聞つゝて昏くるゆの炎とハ今我国ゆく小童のたゝまとゆ
るゆ三百年ぜんゆくさたの風俗遠境ゆもうつりのこりたるゆゑし
京傳翁ゆ引くる日本風土記巻の三時令の部ゆあり渋文の「但街道、
郷村の児童年十五八九已上ゆ及ぶ者各柳の枝と取り皮とをり
木刀ゆ彫成ゆ皮を以復外刀上ゆ纏ひ用火焼黒め皮を
去り以黒白の花と分つ名づけて荷花蘭蜜とゆ再荊棘の
條を取香花神前ゆ挿供次ゆ集る各童手ゆ木刀と執途ゆ
隊伍凡有婚无子の婦木刀と将て遍身打之口ゆ荷花蘭蜜
と含ふかゆゝ炎婦当年孕男と生我国ゆて児童等ゞ人の
門を斗棒ゆくたゝき嫩をだせ聟をだせとのゝしりゆくハ右の風
土記の俗習の遺事ゆゝ
百樹紫ゆ件の風土記ゆ再び荊棘の條を取り香花神前ゆ挿
ハ餅花と神棚ゆ供ぞる事を聞て粥杖の事と混錯
記たるゆゝ炎りとをれハ餅花も古き祝事ゆり

○齋の神の祭

吾ゞ国正月十五日ゆ齋の神のまつりとゆハ所謂左義長ゆり
唐土ゆ爆竹とゆ唐人除夜の詩ゆ竹爆千門の眄燈狀万戸明ゆり
の句あるゆ爆竹ハ大晦日ゆよりる事ゆり吾朝ゆハ正月十五日
清涼殿の御庭ゆゝ青竹を焼き正月の昏始を炎火ゆ焼くく
天ゆ奉るの又ゝ十八日ゆも又竹をかゞり扇を結びつけ同じ
御庭ゆゝ燃ゝ主ゆを祝事ゝせゝ王ゆ民間ゆもゝとゝ学び

て正月十五日正月かざりたるものをあつめて焼すること左義長とて昔よりする事なりこれを斎の神祭りといふも古き事なるべし爆竹左義長の故事俳諧の季寄年浪草に諸書を引てくはしく見えたり○吾が郡中にて小千谷といふ所ハ人家千戸にあまる饒地なりそれゆゑにや斎の神の（斎あるひハ幸とも）祭りも盛大なりこれをまつるにその町々におのおの毎年さだめの場所ありてその所の雪をふみかためて平らにし三間四方に周りしたる高さ六七尺の四角き壇を雪にて作りこれに二処の上り階を作るこれも雪にてする里俗呼て城といふさて壇の中央に杉のなま木をたてて柱とし正月かざりたるものをこの柱にむすびつけ又ハ積あげて七五三をもつて上よりむすびめぐらして蓑のごとくにする（飾をまづくゝりてろくろをつくる）其頂に

大根注連といふものを左右に開る扇をつけて飛鳥の状を作りてつける壇の上にハ席をまうけて神酒をそなへ此町の長たるもの礼服をつけて拝をなし所繁昌の幸福をいのる此事をはりてきよめたる火を四隅より移す油滓など火のうつり易きやうにしてありなしおくゆゑに端々の熾ること迅あがる（此火にて餅をやきてくらへば病をのぞくといひ世にふるくありし事なり）是則爆竹左義長なり他国にてもする事なり或人の話に此事百余年前まで江戸にもありしが火災をおそるゝために禁下てやみたるとぞ○さて又おんべといふ物を作りてこの左義長に翳て火をうつらせ焼を祝事とすおんべハ御幣の訛言なりその作りやうハ白紙と色紙とを数百枚つぎあはせたるを細き幣束のやうにきりさげ、まるく小扇の地紙の形をきりのこしてこれを数千あつめて青竹にてくしとす大小長短ハ作る家の意に

斎の神祭事の図

はゝせたるを以て人ふ誇る棹の末ふひらき扇四ツをよせて扇
ゝ家の紋をでいろ〳〵ろ紙ゆて作るものゆるゝ甚さ美事
ゝりこまを作りてまづおのもゝ〳〵門へ建おく事五月の幟のあ
つひゝ十五日ふいたりてかの場所へかちゆきと左義長ふかぎ〳〵く
焼捨るを祝ひとゝ庭ゝを覗る人群を形すハ勿論事をそうてハ
ゝ〳〵のゝゝゆて喜酒の宴をひら〳〵ゝまこゝ　國君盛德の餘澤
ゝり他所ゆも左義長あまでもまづハ小千谷を盛大とす
百樹曰余京水をゝゝ〳〵越後ふ遊び〳〵時此小千谷の人
岩淵氏牧之老人の親族ゝりの家ふ節をとゝめゝる事十四日八月あり
の嗣子廿四五許号を岩居ゝいふ昏をよゝまて余ふ遇せ〳〵ゝ
甚篤小千谷ハ北越の一市会商家鱗次として百物備ざるこ
ゝゝ〳〵海を去る事僅ふ七里ゆるゝふ魚類ふ乏しからず

余塩沢ふゆゝり〳〵ハ四十余日甚地海ふ遠くして夏ハ海魚ふ
乏〳〵江戸者の口ふ魚肉の上らざり〳〵事四十余日小千谷
ふいゝゝゝゝゝゝて生鯛を喰せ〳〵ふ美味ゆり〳〵事いゝゝの
らず又鮭の時節ゆ〳〵小千谷の前川ハ海ふ朝ゆるの大河ゆれ
ハ今捕〳〵をもゝふ庖丁ゆて味ゆれひ江戸ふまゝれり一日鮭をてん
ぷらゝゝふ物ゆ〳〵てゝぜゝり余岩居ふむゝひこゆゝハ此地ゆ〳〵ふ
名を何〳〵ゝふぞと問ひ〳〵ふ岩居こゝハテンプラとゝゆゝり我
ゝゝゝゝゝ此物の名義曉〳〵ゝ古老ふたゞねこゝゝども知る人
きらゆゆ〳〵先生の説をきゝんとゝふ余答てまゝ食終てテンプ
ラの来由を語〳〵ゝふゝ鮭のてんぷ〳〵と飽ゆぞふ喰せり

○てんぷらの説。煉羊羹の起原

岩居ふ語て曰今をさる事五十余年前天明の初年大阪

ゆく家僕四五人もつゝかせどもの次男年廿七八ばかり利助といふ
ものその身ずからこの二ツもうけの哥舞をつれて山奔し江戸ホ下
り金ず家の京橋南街第一衢對ひの裏屋ヨ住しふ一日事の序ふよりて
金ず家ヨ来ずしより常ヨ山ヲ入して家僕のやうヨ使ふできせ
けるふ花柳ヨ身を果しうるものゆゑなるものゆゑろく才
ゆありくよく用を弁ずるゆゑを一き人ヨ銭ずなりとて古兄
をたづねもとめきあり自利助いふやう江戸ホハ胡麻揚の辻
賣多し大阪ホてハつけあげといふ魚肉のつけあげハうゆきものふ
り江戸ホハいまゞ魚のつけあげと夜ふせふる人ゆしやまこれを
うらんとおもふ古兄京傳いそくこれハよきおもひつきなりまづ
ろうむしてして俄ヨ調じきせふいふも美味なり利助をく
ふふを夜ふせの辻ふうらんふその行灯ヨ魚のごまあげこまる

さんもあゆゆらまくりどやゝあゆゆるゆゆ名をつけゝ玉ひまとひ
けまバ古兄ゆゆらくゆあんして筆をとり天麩羅ゆかきゝく
ふせられバ利助不審の見をゆる天麩羅ハいふゆる所謂ふ
うとゝ古兄ゆゆゆゆ足下ハ今天竺浪人ゆりぶりと江戸
きゝして賣創る物ゆゆふ天ふゆり是ふ麩羅ゆゆ字と下し
ゆゆ麩ハふ麦の粉ゆてつくる羅ハうゆものゆゆゆ字ゆり小麦
の粉のうすものをうけゝゆふ支ゆりゝ戯言ゆまけまバ利助も
洒落ゆる男ゆゆ天竺浪人のぶゝつきゆゆ天ふゝハおりゝろゝ
大ゆよろゝびやゝて块店をいぶゝゆ時あんどんと持きゝうて字と
ゝひゝゆゆ金ずをゆゆれき時天麩羅ゝ大昏ゝて夕ゝふ块てん
ぶゝ一ツ四銭ゆて毎夜ゆりきゝ程ゆりさて一月ゆたぎるゆ
ふ近辺所ゝゆてんぷらの夜ゝせのゝで今ハ天麩羅の名油のごゝく

世上に傳染せしより此小千谷までもてんぷらの名をよぶ事一奇事といふべし されども京傳翁が名づけ親にて利助が賣出しけめ
たりといへる碩学鴻儒の大先生もおもしろしとすてんぷらの講釈せるハ天下に我一人なりとなさむまじけれバ岩居も手をうちて笑ひたり○先年此てんぷらの話を友人静盧翁に語りしに（翁ハ和漢の博達時鳴の聞入あり）翁曰事物紺珠（明人黄一正作廿四巻）夷食の部にてんぷらに似たる名ありきといはれしゆゑ其書を借りえてよみしに○塔不剌とありて注に○葱○椒○油○醤を熬後より鴨或ハ雞○鵞といふを慢火にて養熟とあり蟹とあぶらげにせるか見えたり

○さて天麩羅の播布に類せる事あり因に記す○橘菴漫筆に（享和元年京の田仲宣作）「京師下河原に佐野屋嘉衛といふもの享保年中長崎より上京して初て大碗十二の食卓を料理しく弘めたる是京師浪花に食卓料理の初なりとやまたかの糸剛娘なんといひつるものの老婆ありて近比まで存命せり則今の佐野屋祖なり大坂にくだりてこれ食卓料理あるべく弘りたれど野堂町の貴徳斎など久しくつゞきたるなし」岩居がてんぷらをふるまひける夜その友蓉岳来て（採なるふ菓子や）余が酒をこのまざるを聞て家製なるとて煉羊羹を恵ぬ味ひ江戸に同じ余越後にねりやうかんと賞味して大に感嘆し岩居に謂曰此ねりやうかんも近年のものなり常のやうかんにくらぶれバ味ひまされり吾が茗をこのむころハ常のやうかんそらしやきものゝ口にハ入らざりしに江戸をさる事遠き此地にも出来逢のねりやうかんあるハ実に大平の徳化なりといへし蓉岳も昏画をよくし文事にありて好事ものなれバこゝにきゝてひざをうちてめ菓子ハ吾が家産なりねりやうかんと近来の

かのところへ由来を示し玉へといふ余こたへていはく○寛政のはじめ江戸日本橋通一町目よこ町字を式部小路といふ所に喜太郎とて夫婦に丁稚ひとりをつかひ菓子屋とは見えぬ篇子造りにかんばんもかけず此喜太郎いぜんは　貴重の御菓子を調進するある家の菓子杜氏なりしが奉公をやめてこゝに住し極製の菓子ばかりをせいして茶人又は富家のみへあきなひけりさて此者が工風とてはじめて煉羊羹と名づけてうりけるに（羊羹本字ハ羊肝なる事秘苑日鈔に）とく喜太郎がねりやうかんとて人々めづらしがりてもてはやしぬされども一人一手にてせいするゆゑけふはうりきらしたりとてつひの重箱空しくかへる事度々なりしは余が目前見たる所なりかくて一二年の間に菓子や二軒ならず喜太郎をまねてねりやうかんをせいしそれのみうりしかりしに今は江戸の菓子やいさらなり追て弘り此

文溪堂蔵

小千谷にもあらざれば此国に市会とある所にはかならずあるべく又諸国にもあるべしといひたまへば蓉岳ならで小倉羹なあり八重なるらんすなはちあたひはまからずとしてとろりこれらの事雪譜の名には似気なき弁なれど本文小千谷のちゞみにおもひいでしたれば人の話柄に記とりあまた近古食類の起原さまざまありしは余が食物沿革考に上古より挙て考へしたれどこゝにははぶけり

雪中の狼

初編にもあらはしたるごとく我国の獣冬にいたれば山を踰て雪浅き国へさることこそ雪ふりくして食にとぼしきゆゑなり春にいたるまでみぢの棲へのこるものどもも雪にまぢきこえざるものに食にたらずとふしは夜中人家にちかよりて犬などとり又人にかかる事もありこれ山村の事なり里にては人多きゆゑおそれてきたらず雪中には

雪中狼入人家圖

穴居するハ熊のよふなり熊ハ手に山蟻をぬりつけこれをなめて穴居の食とするよしいふなり○こゝに我郡中の山村に（不祥のことなれバ地名人名をしるさず）まづしき農夫ありけるが老母と妻と十三の女子七ッの男子ありけり此農夫性質篤實にしてよく母につかふ ひとゝせ二月のすへつ用ありて二里ばかりの所へいくらんとてこれ山道なり母いそく出なうるれハ用心なり筒をもちてゆけといふ実にもとて鉄炮をもちゆきけりこれハ農業のかたはら猟をもなすゆゑに国許の筒なりかくて用たしてかへる時はやつし日も暮かゝる帰りくる途中にて吾が村へ入らんとする雪の山陰に狼物を喰ふを見つけ矢頃にねらひより火蓋をきりしにあやまたずうちおとしぬちかよりこれハいかにとみるに人の足なり農夫大におどろきさては村ちかくきたるならんと我家をきづかひ狼はそのまゝにしてはせかへりしに家のまへの雪の白きに血のく

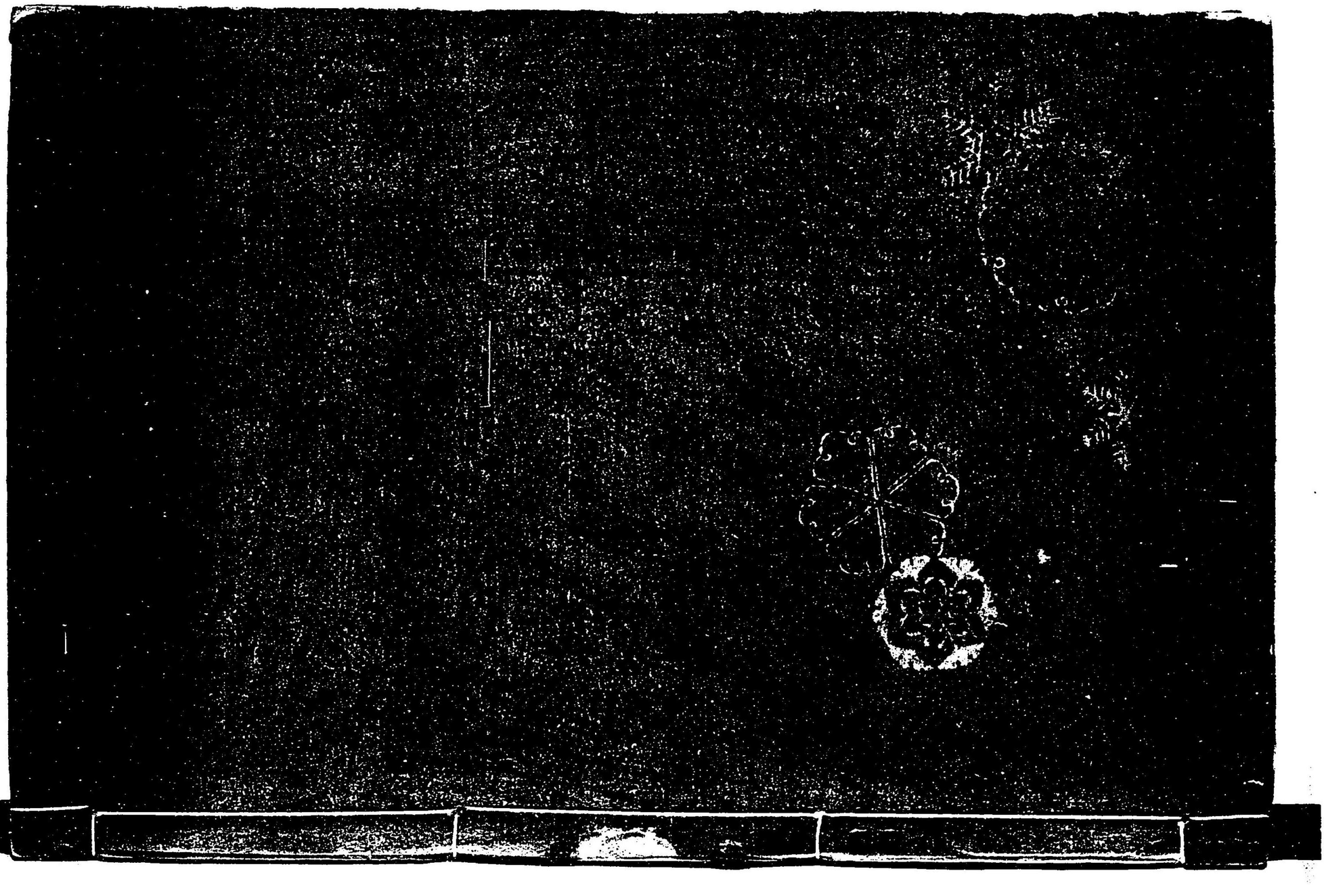
ましたゐ跡をあたりにちるをみてますく\おどろきはせ入りけれバ狼二疋迯さりけり家内をみれバ母ハゐろりのまへにたふれてくひちらされ片足ハくひとられてしゝてゐたり妻ハ囪のもとに喰伏られあたまとそのからだハちゞくの皿ならずくひちらしたるさまなり七ツの男の子ハ庭にありてかしらの半ハ喰はれたり妻はまことにいきありて夫をみるよりおきあがらんとしてちからおよはず狼がきたとばかりいひてたえはてけり農夫ハあまりのことにあきれはてゝ鉄炮をもちて立あがりしがかなしさにても娘ハいかにしてありやとよびけれバ床の下よりはひいで親にすがりつきこゑをあげてなくおやもむすめをいだきてなきけり山家ハ住居もかくしてかまどあるものなれバこまかしの事をしるすのみなりけり農夫ハ時の間に六十の母三十の妻七ッの子を狼の牙にかけられ歯がみをなして口をしがり親子ふたりくらしたるとかや

声をあげてあきおろく村のものもそろふきつけきつう共体
とこておろきはけびくまびれしくあつまりきつう娘よりも
きとたづねまび図とやぶりて狼三疋をせりしづりに竈
ふ火とたきてあうしやるもぐふ床の下へげ入りだきると母さま
とおとうあくてんときて念仏申ておろうとつふくて共ありきを
いつぎき所へつげきらせ次の日のくぐまと棺一ツよ妻童をさ
め母の棺と二ツ野辺おろうとやしろふ涙そそぐざるのいかろう
けるとでおもつまもうぶ筒をかてとひしもの名母の片足と雪の山
蔭ふくらひるる狼をうちおろして母の敵いとうるれど二疋とから
ちしいふ口惜りうんこまよりのち此農夫家と棄娘とつまと
て順礼とでろうちきるのあしだ人のよくまるたまのり
百拾日日本の狼ハ幻化事をきうす唐土の狼ハだけること

老狐ものともすず宋人李昉等ぐ太平廣記百四十巻獸の部ふ十巻狼美
人ふ幻化て少年と通じあるひ人の母ものけて年七十ものりて
ちどもてだけをあらもして逃さり又ハ人の父を喰殺してその父
ものけて手を歴さるふ一日その子山ふ入りて来と採るふ狼き
たりて人の如く立其裾を銜しるふ斧ふく狼の額と斫狼
ものげ去りしゆる家ものつりしふ父の額よ傷の痕あるを視て狼
あるこをさとりこをを殺もふ果して老狼あり親をころしる
ゆる自縣ふりて事の由をつげうる事まで。廣異記宣室
志を引てもるせり悍悪の事ふ狼の字をいつの。殘忍ある
と射狼の心とひ。声のおそろしきと狼声とひ。毒の甚巴
きと狼毒とひ。事の狠を狼こ。反相ある人と狼顧。
義无と中山狼。恣ま食と狼飡。病烈を狼疾とひ。狼

籍。狼戾。狼狽など皆彼より譬て是をのゝりゝ文海抜沙ときこゝ
獣中最可悪ハ狼なり余竊に以為狼ハ狼中にて狼をもて
ども人にて狼なるハよゝ狼をのゝすゆゑ狼なるをも
こせずこゝもごなるハ狼毒をもつる人あり人の狼なるを
狼の狼なるよりも可惧可悪篤実を外面とし奸慾を内
心ともると狼者とひ嫉と悍戾を狼老婆とゝ巧ゝ狼心
をゝゝゝもゝ識者の心眼ハ明鏡なりおゝゝゝ惧ざら
んや恥ざらんや

北越雪譜中巻終



139
7
146

東京圖書館

和書門	地理類	二九函	一一架	一四六號	七冊